

遠江・山と里の民俗

会報 第008号



「懐山のおくない」の継承活動をしている清竜中学校の生徒たち（1月3日）

次世代につなぐ

清竜中学校の取り組み 校長 杉山秀勝

新たに開校された学校です。統合前、熊中学校では後継者不足によって昭和三十年代に途絶えてしまった「神澤おくない」を、昭和五十年からクラブ活動の中で体験してきました。統合後、この伝統芸能の学びは、保存会

芸能に誇りを持ち、ふる里を愛し、ふる里に貢献できる人づくりが行われ、その教育は学校の特色となっています。清竜中学校は、平成十七年に旧天竜市の熊中学校、上阿多古中学校、下阿多古中学校、二俣中学校の四校が統合し、

清竜中学校では、地域の伝統芸能の学びが、文化の継承と共に入づくりのための大切な教育活動となっています。現在、一年生全員が「神澤おくない」「懐山おくない」「青谷の大念仏」の中から自分が学びたいものを選択し、地域の伝統芸能を学んでいます。そして、その学びを土台として、ふる里に残る伝統



「青谷の大念仏」を体育館で披露する

や地域の方々の熱意によって他地区の伝統芸能と共にしっかりと引き継がれることになり、現在に至っています。伝統芸能の授業は二学期に行われ、保存会の方々だけでなく浜松市文化財課職員も講師として学びを支えています。生徒たちは、講師の方々の話や指導する姿から、舞や笛、太鼓の演奏技術等を身につけるだけでなく、ふる里の伝統を継承することの意義や地域に生きるということについて学んでいます。そし

て、その学習の成果を十一月の参観会で保護者に発表しています。さらに、一月三日に行われる「懐山おくない」と四日に行われる「神澤おくない」で舞を披露しています。清竜中学校の伝統芸能の学びには、講師となる保存会の方々の高齢化と生徒数の減少という大きな課題があります。しかし、開校以来続けられてきた教育は、文化の継承という種として地域にまかれ、それは次世代につなぐ芽となつて確実に成長しています。



1月4日伝統芸能「神澤おくない」を披露した

大学生が民俗芸能に挑戦

浜松学院大学の
若者がつなぐ

無形民俗文化財 孕みの舞を舞う思い

浜松学院大学
一年 山崎真理子

私は地元が浜川という事もあり、川名ひよんどりの存在は小さいことから知っていました。実際に観るということはなかった。孕みの舞を舞うという事を知った時は不安な気持ちでした。

練習初日、孕みの舞を初めて観た率直な感想は「チントトの方が覚えられない」というものでした。チントトの方は足の運びが難しく、最初の頃は教えてくださる会長の足を真似て練習をしていました。練習を繰り返していくうちに、ふとしたことに気がつきました。それは「太鼓の音に合わせて足を動かせばいい」という事でした。些細なことですが、そのことをわかった時から練習も楽しくなってきました。

本番当日、自分の順番になるまで「今まで練習して来たようにやろう」と思っていました。あがり症の私は平常心で踊ることなどできず、一つ一つ動作をする時心の中で「これであっているよね?」「たぶん大丈夫」と自問自答を繰り返しているう

ちに、舞が終わっていました。舞を踊り終わってしまおうと、それまでの事があつという間に思えてきて、少し寂しさを覚えてきました。寺野ひよんどりと川名ひよんどり、どちらも踊るということは本当に貴重なことなのだと思えた瞬間でもありません。

川名の方たちは皆さん丁寧で優しく教えてくださり、感謝しています。川名ひよんどりという伝統を重んじた素晴らしい文化をこれからも絶やさないでほしいと願っています。大河ドラマ「おんな城主直虎」初回放送パブリックビューイングイベントでは微力ではありますが、その一歩の力になれたらと思いつ



らせていただきました。

今回、国指定重要無形民俗文化財の川名ひよんどりに参加でき貴重な体験をすることができたことを誇りに思います。

伝えるのは同じ若い世代

浜松学院大学
一年 山崎誠司

第二十回静岡民俗芸能フェスティバルin浜松のシンポジウムに参加して、二つのことを感じました。

一つは、若い世代に伝統芸能の魅力を伝えるのは、同じ若い世代なのではないかということ。二つは、若い世代に伝統芸能に携わる方々

と一緒に登壇させていた。多くで、登壇された方々は、それぞれの魅力を存分に発信していました。しかし、残念ながら会場には若者が少なく、若い世代への発信は十分ではないように思いました。シンポジウムのように興味のある方々が集まる場所だけでなく、様々な若者に伝統芸能の魅力を発信するには、若者が持つ交友関係や日常的に通っている場所で発信する必要があります。私はそのような場所や機会を、民俗芸能の魅力を発信をすることで、より多くの若者に伝統芸能に興味を持ってもらえると考えています。そして、シンポジウムに参加した私

のように、同世代が参加や手伝いをしてるのであれば、若者もつと伝統芸能に関わりやすくなるのではないかと思います。これだけ魅力的な伝統芸能がある中で、それを知らずに過ごしているのは非常にもったいないことだと思えます。若いうちに素晴らしい伝統芸能に関わることができた私たちが、その魅力を伝える担い手になるべきだと感じています。



雄踏文化センターにて(1月22日)

最後に、私たちが民俗芸能の魅力を伝えるときに注意することは、それぞれの民俗芸能が持つ本来の意味や祈りをしっかりと理解し、伝えることだと思います。

寒い、痛い、熱かった

浜松学院大学
一年 鈴木崇斗

このたびはご縁があり、五百九十一回目となる国指定重要無形民俗文化財の「川名のひよんどり」に携わらせていただきました。

何百年も続く祭礼と川名の歴史を学ぶために何度か現地、川名へ出向き地域の方や保存会の方より多くを教えていただき、時には保存会の方が大学へ来てくださり、緊張の中、当日を迎えました。

私は若衆六人のうちの一人として、極寒の川名川で身を清めた後、しめ縄を腰に巻き薬師堂の戸口で禰宜の持つ大松明と対峙するという大役を担わせてい

二つめは、伝統芸能の多様さについてです。一口に伝統芸能と言っても、神楽や歌舞伎など様々な種類が存在しています。この多様性は、私達、若者にとつては「興味を持ち始めるきっかけの多さ」とも言えるのです。選択肢が多ければ、興味を持つ機会も増えます。そして、さらに興味が増せば、違った特徴を持つ様々な伝統芸能が存在し、のめり込んでいく環境があるのです。



川名川でのみそぎ



ただきました。冷たい・痛い・熱いが続く役です。しかし、自然に厳かな気持ちになり、長い歴史のある祭りに参加させていだいたことへの感謝と五穀豊穡、無病息災、子孫繁栄を祈願する時間でもありました。

今年、NHKの大河ドラマで当地の井伊直虎が主役の「おんな城主 直虎」が放映されるということで、会場の福満寺薬師堂やひよんどりがメディアに取り上げられることが多く、練習時から新聞やテレビの取材、終わった後にはラジオの出演と自分にとって貴重な体験が続きました。

ひよんどりには、私たち浜松学院大学の学生が中心となって活動している市民団体「やまびこチャレンジ」から、私と同じ若衆に一人と舞手に二人、また若衆の練りには男子学生全員で参加させていただきました。今後、ご縁がありましたら伝統ある文化、芸能、祭礼、行事に参加し継承していきたいと思えます。

雄踏息神社の田遊祭

嶋 竹秋

三遠南信地域で行われている五穀豊穡を願う田遊びは、浜松市西区雄踏町の風の神を祀る息神社でも、田遊祭として、三月の初午の日に近い日曜日に宮座主催で執行している。

浜名湖東岸に位置する雄踏町は、旧名を宇布見村と言い、『遠江風土記伝』に「土地は山無く石無く、海に属なり沙土なり、藻を採りて田を養い、海を烹て塩を為し、以て産業と為す」とあり、遠江の山間部とは景観も産業も異なっていた。

田遊祭の流れ

拜殿濡れ縁に四神旗と共に、緋色地に息神社の神紋と宮座の文字を金糸で刺繍した旗を立てている。祭場となる拜殿に入ると、すでに中央に板で囲った仮の田所がしつらえてあり、神棚の前に御祭神を表した七面の古面が飾られていた。

田遊祭の参加者は、宮座の中から代官、出主、歌い手が各一名、稚児四名が主な役になる。そして宮座を構成する各姓の六名（ろくみょう―中村・吉田・内田・藤田・山内・山下）の代表が田所の南側近くに正座し、その背後に宮座の人々が着座する。

祝詞奏上などの神事がすみ、

禰宜が太鼓を三連打すると、田遊祭が始まる。



「種を蒔こうよ」と種まきが始まる

歌い手が「田遊神楽歌」の冒頭部分の「田を作れ〜。田を作らんば。門田を作れ」と抑揚をつけて唱える。

田打ちの場面では、田主が「あら田うつとて。駒うち出したり」、全員が「田をうつてまいらする。〜」。禰宜が太鼓を三回連打すると、全員で「よい。よい。よい」と唱える。禰宜の打つ太鼓によって田遊祭が進行する。

それより後は、各姓ごとにとまり、または全員で詞章を唱えたりする。

苗代田の選定↓肥料集めを唱えた後に、祭りの中心場面となる田所へ稲種を一升蒔く、種蒔きが行われた。

稲は禰宜が神棚から降ろして代官に渡し、代官はそれを田主



鈴を振りながら田所の周りを三回廻る

に渡す。田主はそれを六名の代表に分けて廻る。終わると、代官の「種を蒔こうよ」の言葉で、代表者が田所へ三回蒔く。

次に、祝いの餅つき↓鳥追い↓苗取り↓代かき↓田植え↓鳥追いと続き、再び宮座参加者が各自の決まった部分を唱える。

最後に、華やかな緋袴に千早を着た四人の稚児が、鈴を振りながら田所の周りを三回廻る。その時に太鼓の音に合わせて一同が「万歳楽」（おめでたいという意味）を二十一回唱えて、田遊祭が終わる。

復活した田遊祭

息神社の田遊祭は、着座で詞章を唱えることが多く、所作や踊が見られない。

宝暦七年（一七五七）に始まった田遊祭は、明治政府の「神仏分離令」により、神楽歌の中の仏の部分が消されたので踊り

が不可能になり、明治四年（一八七二）に田遊祭は中断された。明治四十年（一九〇七）になり、「神楽歌」は復活した。その内容は他地域の田遊びと同じ構成になったが、所作や踊りが途絶え、詞や唄だけの田唄祭になったという。中断されてから三十六年間もたし所作や踊りは、伝承できなくなった。

復活した明治四十年から今日までの一〇九年間は、五名から六名による宮座組織（現在一六五戸）で奉仕してきた。

田遊祭のこれから

最近の世代交代により、田遊祭への関心が薄れ、世帯数も減少していることから山内岩次郎宮座会長は、お札の言葉で、「皆さん方の知恵や援助を受けながら、息神社田遊祭を保存し、発展させたい」と述べた。

『懐山おくない―詞章集』では、息神社の「飯七櫃、粥は九桶、それを盛る盛るとて、よも榮えたりやな」の詞が、懐山より整っている指摘する。

研究者の協力を得て、詩章の読み解きができ、その上で幾つかの所作や踊りが復活すれば、往年の田遊祭に近づくだらうと思つた。

（註）元来、田遊祭であったが、明治期には田唄祭と言うようになり、今日は田遊祭の語句を使い「たうたさい」と言っている。

人生を決めた遠江への旅 民俗学者 室井康成

東京の「お城少年」

私は小学生の頃から、城跡めぐりが好きな一風変わった少年で、暇さえあれば東京近郊の古城址を探訪していた。

初めて遠江の地を訪れたのは、平成元年（一九八九）の盛夏であった。

私は浜名湖畔のユースホステルを拠点にこの地を巡ることにした。手始めに三方ヶ原の古戦場を訪ねようと、浜松駅前のバスセンターに行き、数多ある路線図を眺めていると、根洗・祝田・井伊谷・伊平・都田など、本で読んで知っていた地名が並んでおり、私の胸は俄然高鳴った。

井平城との出会い

初めて訪れた伊平（浜松市北区引佐町）は、盆地の中心部に家々が集まる典型的な山里であった。目に付いた酒屋の主人に、この地にあるはずの「井平城」の位置を尋ねると池田利喜男氏を紹介された。池田氏の名前は、小和田哲男先生の著書『三方ヶ原の戦い』（学習研究社）に出てくるので、すでに知っていた。

私は、思いがけず地元の識者に会えることになり、にわかには緊張した。池田氏は不在であったが、奥様のはからいで、郷土史に詳しい高柳耕太郎先生に電話を入れ、案内方を依頼して下さった。そこから、私と伊平との約三〇年にわたるお付き合いが始まった。

少年の夢

翌年も伊平を訪れ、高柳先生の運転する車で、遠く愛知県の山間部である設楽町や作手村の古城址をめぐる。昨年会えなかった池田氏にも面会が叶い、多くの教示を得た。特に、高柳先生が、池田氏の著書『伊平史跡案内』（一九九一年 伊平歴史と文化を守る会）に寄せた序文の中で、次のように紹介してくださった。

それまで自分の興味関心に任せ、ただ漫然と各地の古城址を歩いてきた自分の行動に意義付けがなされたような気がして、これはいざれ何かの形でまとめなければならぬと思っ

「昨年八月の休暇に東京都大田区の中学一年の男子生徒が単身伊平を訪れて、井平城跡と仏坂の古戦場跡を見学し、『写真を撮

って自分の研究を確かめて帰りました。文化の中心東京からはるばる未だ広く知られていない伊平の古城の跡を研究に来た中学生にいたく感動すると共に史跡は狭い地域だけのものではないことを痛感致しました」

伊平から研究の道へ

その後、大学に進学した私は、学友たちとともに、再び伊平を訪れ、井平城跡の縄張り図を作成した。その際も地区の皆様のお厚意により、集会所での宿泊し、食事や入浴は池田氏や野末氏のご家族に、ご協力をいただいた。

こうして完成した縄張り図は、私が論文にまとめ、静岡古城研究会の機関紙『古城』第四三号（一九九七年）に投稿し、掲載された。奇しくもこの論文が、私にとって初めての「学術的」な仕事となったのである。だが私の関心は、その後、歴



井平城の鳥瞰図



井平城と井伊直虎の講演をする室井氏

史や城郭からは急速に離れてゆき、専門も歴史学ではなく民俗学となった。さらに研究対象地域も九州から朝鮮半島へと及んでゆき、遠江とは疎遠になっていった。

しかし、歴史そのものよりも、これを語り継いできた人間とその生活に目を向けるという民俗学を選ぶことになったのは、無意識の内に、私を歓迎してくれた伊平の人たちの存在があったことは疑いようがない。

大河ドラマに寄せて

二〇一七年のNHK大河ドラマは、伊平を含む旧引佐町が舞台となった『おんな城主・直虎』である。これに伴い、伊平地区でもさまざまな関連行事が挙行された。中でも、地元NPO法人「いーら・いだいら」の皆さま

んが、私が描いた井平城の縄張り図をもとに立派な鳥瞰図を作成し、看板やリーフレット、はたまた「井平城弁当」の包み紙に利用して、同城のPRをていることに、私は心を動かされた。「井伊直虎」の実像については、私は研究者として異論もあるが、こうして地元が盛り上がっている姿を見るのは、率直に嬉しい。何よりも、長年にわたり郷土史の掘り起こしに心血を注がれてきた、泉下の高柳先生と池田氏が喜んでおられると思う。

編集後記

なかなか伝統行事を伝えていくことは難しく、世間では貴重な伝統芸能が消えていくことも珍しくない時代になっています。

今回、中学生や大学生の民俗芸能の関わり取材しました。中世から伝わる芸能を体験を通して、若者の感覚で民俗芸能をどう捉えたのでしょうか。

厳格な祭の本番にも参加して文化財の大切さを知ることが出来るようでした。

この体験を同じ若者に伝え、地域での大切な祭を繋いでいく大切さを知ってもらいたいと思います。HK